

青年期における偽りの自己に関する一考察

—感情体験及び学校生活適応の検討を通して—

伊藤樹里*・西村佐彩子**

(*京都教育大学総合教育臨床センター研究員, **京都教育大学)

The false self in adolescence: Examination of adolescents' feelings experience
and how they adapt to school life

Juri ITO, Sayako NISHIMURA

抄録：本論文は、Winnicott, D. W. が提唱した概念である「偽りの自己」について、その内的構造を明らかにし、偽りの自己が感情体験と学校生活適応に与える影響について検討することを目的とした。また、偽りの自己の問題と混同されやすい同一性拡散を対照として、感情体験及び学校生活適応に与える影響を比較することで、偽りの自己の特徴の明確化を試みた。偽りの自己が感情体験に与える影響については、偽りの自己尺度の妥当性に関する課題はあるが、偽りの自己は感情体験に対して負の影響を与えるという結果が得られた。学校生活適応については、同一性拡散と偽りの自己の特徴の1つである「空虚感」が負の影響を与えるという結果が得られた。そして、偽りの自己の特徴については、クラスター分析を行った結果、女性の「偽りの自己」群の「迎合的態度」や「他者との感覚のズレ」、「感情解説」が「不適応」群と比べて有意に高く、本研究で抽出された群の中で最も偽りの自己に近い群となった。また、「偽りの自己」群と「不適応」群との比較において、男女共に偽りの自己尺度の下位尺度である「感情解説」に大きな差がみられたことから、「感情解説」が高いことが、偽りの自己の特徴を弁別する上で重要になることが示唆された。

キーワード：偽りの自己, 感情体験, 学校生活適応

I. 問題と目的

1. 青年期における自己の感覚—「偽りの自己」概念について—

我々は、現実世界で起こる出来事を自らの身体を通して主観的に感じ、体験する。Winnicott, D. W. (1965) は、このように個人が主観的に感じること、あるいは自分が「存在することの主観的感覚」を「自己」と呼び、自己が正常に機能することで、個人に生き生きとした、リアルな感覚が芽生えると述べている。しかし、実際の臨床場面では「自分は偽善者」、「生きていても意味がない」、「空しい」などといった、まるで違う自分を生きているかのような感覚や空虚感が、主に青年期の子ども達によって語られている。そして、彼らは一見社会的に適応しているように見えるものの、内的には自分に対する違和感を抱え、他者あるいは環境に迎合するように生きていることが報告されている(榎木, 2003; 堀, 2006; 飯島, 2002; 北山, 1999; 内田, 1997)。

このような個人の迎合的な生き方について、Winnicott (1965) は彼独自の発達論的視点から「偽りの自己 (false self)」という概念を用いて説明している。Winnicottによると、自己は早期幼児期の養育者による「抱える環境 (holding)」を基盤として発達していく。この環境の中では、幼児の欲求が自発的身振りを通して表現される。そして、養育者がこれに適切に応じることで、幼児の自我は強化され、本能 (イド欲求) を自己の一部として体験して実在感や現実感を得ることができる。また、ここでの幼児の自発的な身振りは、彼らの潜在的な「本当の自己 (true self)」の存在を示している。しかし、養育者が幼児の自発的な身振りにうまく応えてやれなかった場合、養育者は自身の身振りを幼児におしつけ、幼児はそのおしつけられた身振りをあたかも自分の欲求

の表現であるかのように演じることになる。つまり、幼児は外的環境に迎合 (compliance) せざるを得なくなり、この外界からの侵襲 (impingement) に対する防衛として「偽りの自己 (false self)」が組織化されていくのである。

しかし、偽りの自己は、館 (2012) が「その人が生きるために適応しようとしたものであり、その側面を評価することが必要である」と述べているように、社会適応のための本質的な一面でもある。また、Winnicott 自身も偽りの自己を必ずしも病理としては見ておらず、健康的な場合であれば、礼儀正しい社会的な態度や妥協する能力として現れると言及している (Winnicott, 1965)。だが、その防衛が強固になりすぎた場合には、偽りの自己は本当の自己を隠蔽し分裂 (split) してしまうため、偽りの自己が実在のものとして確立し、リアルに感じる事が阻害されて空虚感がもたらされたり、自己の一貫性をめぐる深い不安が生じたりする。

2. 偽りの自己とスキゾイド・パーソナリティ、境界例との関係

このように空虚感や自己の一貫性をめぐる問題をもたらす偽りの自己は、同じく幼児期の母子相互作用に着目した概念であるスキゾイド・パーソナリティや境界例との関係が指摘されている (Guntrip, 1971; 館, 2012; 堀, 2006)。スキゾイド・パーソナリティについては、山川 (2002) が、Winnicott (1965) の偽りの自己論や Fairbairn (1952), Guntrip (1971) のスキゾイド論を背景に「schizoid心性尺度」を作成して、schizoid心性の内的構造を明らかにすることを目的とした実証的研究を行っている。その結果からは、schizoid心性尺度が「情緒関係悲観」、「内的未統御感」、「外界への迎合」、「自己抑制傾向」、「対象の物扱い」の5つの下位尺度で構成されることが明らかとなった。中でも「内的未統御感」、「外界への迎合」、「自己抑制傾向」については、他者への迎合的態度やまとまりのなさ、他者との感覚のズレの自覚などといった偽りの自己の特徴を有していることが報告されている。一方、「対象の物扱い」、「情緒関係悲観」については、万能的態度や外界との接触に対する否定的な態度といった Fairbairn (1952) や Guntrip (1971) のいうスキゾイド・パーソナリティの特徴を表しており、偽りの自己の特徴とは一見相反しているように見える。しかし、このような相違点については、schizoid心性尺度が Winnicott や Fairbairn などのスキゾイド論を包括して作成されていることを考慮すれば理解可能である。

境界例については、そもそも Winnicott 自身が、偽りの自己の特徴をもつ者を少数例の境界例の中から見出したという背景がある。境界例は、一般的に不安定な対象関係や感情不安定性などの特徴をもつが、これらの特徴をもつ群は一般青年の中にも見出されている。江上 (2011) は、このように「社会的・文化的に逸脱しない範囲ではあるものの、対人関係・自己像・感情の不安定および空虚感、衝動性、見捨てられ抑うつなどを抱く人格特徴」を「境界例心性」としている。偽りの自己についても、その構造をもつ者は一見適応的に見えるが、境界例心性と同様に内的には非常に空虚である。また、境界例や境界例心性と偽りの自己が類似しているという見解は、このように自己像の不安定性や空虚感を抱くことだけでなく、偽りの自己による防衛が破綻した場合に、感情の不安定性や見捨てられ不安などといった一過性の境界例水準の状態に陥ることからも理解できるだろう (堀, 2006)。

3. 偽りの自己が及ぼす影響—感情体験と環境への迎合—

自己が正常に機能している場合、個人は自身の感情をリアルなものとして体験することができる。中田 (北出) (2006) は、このような「自分の感情に正面から向き合い、それをしっかりと抱えつつ、しみじみと感じ入るような体験」を「豊かな感情体験」と定義している。Winnicott (1965) は、偽りの自己が極端に組織化された個人の感情体験について、その個人のリアルな感覚は失われ、代わりに空虚感がもたらされると述べている。また、Fonagy, P. も Winnicott と同様、「メンタライゼーション (mentalization)」の知見から、偽りの自己が組織化された個人の感情体験について述べている。メンタライゼーションとは、「自分を含む人の行為について、こころの状態と因果関係をもつものとして解釈する過程」(Fonagy, 2001) のことである。Fonagy は、偽りの自己が組織化された個人のメンタライゼーションの機能は「過活性化」しており、「養育者の中の意図性を理解

するようになることはできるが、そのために自己理解を犠牲にしてしまう」ため、個人には自分の人生が空虚なものとして体験されると述べている。このFonagyの見解からは、偽りの自己構造が、個人の感情体験を乏しいものにすることが理解できる。そして、この見解を逆説的に捉えると、メンタライゼーションの機能が過活性化した個人は、他者の意図性を理解して迎合的な態度をとり、彼らの生活する環境、青年期であれば生活のメインとなる大学などの学校生活において非常に適応的にふるまうことが想定される。

4. 本研究の目的

偽りの自己という概念は、自分に対する違和感を語る個人への理解を助ける。しかし、実際に偽りの自己が実在のものとして確立している場合には、その個人は周囲の人からは非常に適応的にみられることが多い。臨床場面においても、治療者が偽りの自己を本当の自己と取り違えてしまい、治療が全く進展しないケースが少なくない（榎木，2003；堀，2006；Winnicott，1965）。また、偽りの自己の特徴である空虚感やリアルな感覚のなさについては、青年期における同一性拡散の感覚と非常に類似しているため、両者の状態像が混同されやすいという問題が指摘されている（Fischer，1980）。このような問題は、臨床場面においてもクライアントへの理解に影響を及ぼすことが考えられるため、弁別しておく必要がある。

これまで、偽りの自己に関する研究は、偽りの自己という概念の性質から実証的研究を行うことに困難さがあるため、事例研究としてのみ報告されてきた。しかし、実証的研究を行うことで、一般青年において偽りの自己がどのような特徴をもって表れるのかを多面的かつ明確に捉えることが可能となる。そして、偽りの自己の特徴が明確化されることによって、臨床現場でのスクリーニングとして活用し、同一性拡散との弁別を図ることも可能となるだろう。そのため、事例研究ではなく、実証的に偽りの自己の構造やその影響、同一性拡散との違いについて明らかにすることは意義があると思われる。

そこで、本研究では、青年期に焦点を当て、偽りの自己の内的構造を明らかにし、感情体験と学校生活適応に対する影響について検討していく。また、同一性拡散を対照として、偽りの自己の内的構造と感情体験及び学校生活適応に与える影響について比較することで、偽りの自己の特徴の明確化を試みる。

偽りの自己を測定する尺度については、以下の3つの尺度を使用する。1つは、「schizoid心性尺度」（山川，2002）である。schizoid心性尺度は、「情緒関係悲観」、「内的未統御感」、「外界への迎合」、「自己抑制傾向」、「対象の物扱い」の5つの下位尺度、全42項目で構成されている。しかし、先述したように、「対象の物扱い」、「情緒関係悲観」因子については、主にスキゾイドの特徴を表しているため、本研究では、「内的未統御感」、「外界への迎合」、「自己抑制傾向」因子のみを採用して用いることとする。また、上記の三因子のみでは、偽りの自己の特徴を包括するには不十分であると考えられたため、スキゾイドと同様に偽りの自己との関係が示唆されている境界例心性を測定する「境界例心性尺度（江上，2011）」の「空虚感」因子と、偽りの自己の適応的側面を測る指標として「ソーシャルスキル自己評定尺度（相川・藤田，2005）」の「解読」因子を新たに加えることとした。「空虚感」因子については、一見適応的な偽りの自己がもつネガティブな側面として重視されるべき点である。また、「解読」因子は、相手の表情や態度から相手の気持ちを読み取る項目で構成されており、これは環境に迎合するという目的のために相手の意図性を理解する能力に長けている偽りの自己の特徴に匹敵する（Fonagy，2001）。

以上のことから、偽りの自己構造については、偽りの自己尺度に含まれている因子が、その構造に寄与していることが想定される。そして、同一性拡散傾向をもっている者と想定される者に予測される偽りの自己尺度の得点については、「内的未統御感」、「自己抑制傾向」は同様の動きを示すが、「迎合的態度」や「解読」スキルに関しては、偽りの自己構造をもつ者よりも低い得点を示すのではないかと推測する。「空虚感」については、偽りの自己と同一性拡散では質的に異なると考えられるが、本研究では、偽りの自己構造をもつ者が抱く空虚感に合わせて質問紙を選定したため、「空虚感」についても偽りの自己構造をもつ者より低い得点を示すのではないかと仮説をたてる。

また、偽りの自己が影響をもたらすと考えられる感情体験については、偽りの自己構造が健康的な場合を除

いて、乏しくなると考えられる。これに対して、同一性拡散は、同一性拡散群が不安感や抑うつ気分などといった神経症様症状を呈しやすいことが明らかにされていることから（中谷・友野・佐藤，2011），感情体験の乏しさはあまりみられないのではないかと推測する。また，学校生活適応については，他者や環境に迎合し，周囲から適応的にみられる偽りの自己の者は，学校生活においても非常に適応的であるが，進路に対する不安や「自分」という存在に対する問いが露呈する同一性拡散の状態の者は，学校生活への適応が損なわれていることが予測される。

以上のことを踏まえて，本研究では以下のような仮説をたてた。

仮説1. 偽りの自己は同一性拡散よりも，感情体験に対して負の影響を与える。

仮説2. 同一性拡散は偽りの自己よりも，学校生活適応に負の影響を与える。

II. 方法

1. 調査対象

関西および中部圏内の大学生・大学院生 288 名のうち回答に不備のあった 17 名を除く 271 名（男子 109 名，女子 162 名）が分析対象となった。平均年齢は 20.17 歳（ $SD = 1.48$ ）で，有効回答率は 94.10%であった。

2. 調査時期

2014 年 10 月に実施された。

3. 質問紙の構成

(1) フェイスシート（学部，専攻，年齢，性別）

(2) 偽りの自己を測定する尺度（以下，偽りの自己尺度と表記）

「schizoid 心性尺度（山川，2002）」の「内的未統御感」，「外界への迎合」，「自己抑制傾向」の 3 因子（合計 28 項目），「境界例心性尺度（江上，2011）」の「空虚感」因子（10 項目），「ソーシャルスキル自己評定尺度（相川・藤田，2005）」の「解説」因子（8 項目）の合計 46 項目で構成した。回答は，schizoid 心性尺度にならない「非常にあてはまる（7点）」，「かなりあてはまる（6点）」，「どちらかといえばあてはまる（5点）」，「どちらともいえない（4点）」，「どちらかといえばあてはまらない（3点）」，「あまりあてはまらない（2点）」，「全くあてはまらない（1点）」の 7 件法で求めた。

(3) 同一性拡散を測定する尺度（以下，同一性拡散尺度と表記）

「自我発達上の危機状態尺度（A 水準）（長尾，1989）」の「同一性拡散」因子（6 項目）を採用した。回答については，原尺度は 5 件法であるが，本研究では偽りの自己尺度と統一するために 7 件法で求めた。

(4) 感情体験を測定する尺度（以下，感情体験尺度と表記）

「感情体験尺度（Feelings Experience Scale ; FES）（中田（北出），2006）」を用いた。回答は，原尺度では 4 件法が用いられているが，本研究では偽りの自己尺度と統一するために 7 件法で求めた。

(5) 学校生活不適応の尺度（以下，学校生活不適応尺度と表記）

学生が学校生活にどの程度適応しているかを測定するという本研究の目的に合わせて，「メンタルヘルス尺度（松原・宮崎・三宅，2006）」から，「学業へのつまずき」，「大学生活への充実感の乏しさ」の 2 因子（合計 12 項目）を採用した。回答は，原尺度では 5 件法が用いられているが，本研究では偽りの自己尺度と統一するために 7 件

法で求めた。

4. 手続き

本調査は無記名かつ任意で行い、回収については①大学の講義を受講している大学生に対して、講義の一部を利用して質問紙を一斉に配布し、その場で回収する、②質問紙を配布した後、郵送してもらう、のいずれかで行った。

なお、偽りの自己尺度の作成にあたって、偽りの自己尺度に使用する各尺度の著者に尺度の使用許可を得た。

5. 分析計画

仮説 1. 2. の検証のため、偽りの自己尺度の下位尺度と同一性拡散尺度を独立変数、感情体験尺度、学校生活不適応尺度を従属変数とする重回帰分析を行った。

Ⅲ. 結果

1. 各尺度の因子分析結果

(1) 偽りの自己尺度

偽りの自己尺度の因子構造を確認するために、全46項目を対象に探索的因子分析(重み付けのない最小2乗法・Promax回転)を行った。その結果、スクリープロットおよび因子の解釈可能性を考慮して、因子負荷量が.40に満たなかった14項目を分析から除外し、最終的に4因子全32項目が採用された。最終的な因子パターンと因子間相関をTable1に示す。第一因子(10項目)は、山川(2002)のschizoid心性尺度の「自分の感情・考えをストレートに出すことに抵抗がある」、「私は他人が思っているイメージに合わせて行動している」など、自分の気持ちや考えを十分に表現できずに、他者に合わせるといった項目から成るため、「迎合的態度」因子と命名した。第二因子(7項目)は、「表情やしぐさで相手の思っていることがわかる」、「話をしている時、相手の表情のわずかな変化も感じとれる」など、相川・藤田(2005)の成人用ソーシャルスキル自己評定尺度の「解読」因子の項目から成るため、「感情解読」とした。第三因子(7項目)は、江上(2011)の境界例心性尺度の「人生に希望はないと思う」、「私は生きがいのある生活をしていると思う(逆転項目)」など、個人が空虚感を感じていることを表す項目から成るため、「空虚感」因子とした。第四因子(8項目)は、主に山川(2002)のschizoid心性尺度の「内的未統御感」因子の項目から成っているが、「考えていることと感じていることの間ズレがある」、「自分の中にあれこれ矛盾した存在があって、まとまった自分がないように思う」など、自分の感情や気持ちのまとまりのなさを表す項目の他に、「自分は他の人達とは違っている」、「私は世間一般からはみ出していると思う」など、自分の感覚に対する違和感や他者とのズレを表す項目も含まれているため、「他者との感覚のズレ」因子と命名した。

Table1 偽りの自己尺度の因子分析結果

項目内容	I	II	III	IV
22. 自分の感情・考えをストレートに出すことに抵抗がある*	.795	-.110	.097	-.097
5. あまり本心を言わず、ほとんど人に対してつい顔色を見てしまう*	.773	.010	-.047	-.175
35. 人前であるがままの自分を出すことができない*	.757	-.019	.031	-.011
33. 相手になんとなく話を合わせることで拒絶されないようにしている*	.754	-.006	.113	.074
42. 自分のことを見せないように演技している面がある*	.622	.066	-.066	-.160
43. 人前でいる時の私は本当の私ではない*	.603	.134	-.144	.099
27. 私は他人が思っているイメージに合わせて行動している*	.554	.119	-.001	.122
21. 人に自分の気持ちを表現するのが難しいと思う*	.547	-.169	-.040	.061
26. フタを開けて自分を見せるのが怖い、フタを閉めているのもつらい*	.540	-.010	.060	.134
45. 自分の気持ちをさとられないように話すときがある*	.445	.119	.070	.212
6. 表情やしぐさで相手の思っていることがわかる [†]	-.025	.867	-.120	.006
9. 顔つきから相手の感情を読みとれる [†]	.019	.779	-.098	-.124
11. 話をしている時、相手の表情のわずかな変化も感じとれる [†]	.081	.730	.039	-.152
28. 初対面でも、少し話をすれば相手がどんな人か大体わかる [†]	-.004	.570	.104	.034
40. 自分の言葉が相手にどのように受け取られたか察しがつく [†]	.151	.531	.072	.123
15. 嘘をつかれても、たいてい見破ることができる [†]	-.074	.499	-.078	-.009
30. 自分に関心をもっている人は、すぐに見分けられる [†]	-.108	.433	.236	.165
1. 私は生きがいのある生活をしていると思う [‡]	.132	.031	.781	-.021
10. 毎日の生活にはりがある [‡]	.254	.138	.681	-.193
7. 人生に希望はないと思う [‡]	-.102	.137	-.639	.171
2. 私は自分自身を尊敬することができる [‡]	-.198	.031	.638	.162
12. 自分は誰かに必要とされる人間だと感じる [‡]	-.120	.127	.555	.084
14. 自分が幸福だとは思えない [‡]	.019	.192	-.551	.147
29. 自分にも何かとりえはあると思う [‡]	-.287	.010	.508	.299
18. 考えていることと感じていることの間でズレがあるとと思う*	.131	-.103	.048	.601
38. 自分の考え方が周りの人と違うんじゃないかという気がする*	.150	-.106	.018	.571
32. 意識と感情が自分の中でまとまらないところがある*	.160	-.012	-.056	.543
34. 自分は他の人達とは違っている*	-.193	.105	.071	.512
19. 気がついたら違うところに意識がとんでいることがある*	.095	.004	.061	.500
41. 自分の中にあれこれ矛盾した存在があって、まとまった自分がないように思う*	.288	-.089	-.093	.472
36. 私は世間一般からはみ出していると思う*	-.052	-.072	-.263	.467
46. 言葉は口に出した途端に自分の思いからかけはなれると思う*	.111	.113	-.145	.466
α係数	.89	.82	.82	.80
因子相関行列				
I	—	-.231	-.446	.456
II	—	—	.344	-.039
III	—	—	—	-.250
IV	—	—	—	—

注) * : shizoid心性尺度から抜粋, ‡ : 境界例心性尺度から抜粋, † : ソーシャルスキル自己評定尺度から抜粋。

(2) 同一性拡散尺度

自我発達上の危機状態尺度 (A水準) (長尾, 1989) における「同一性拡散」因子 (全6項目) に対して重み付けのない最小2乗法・Promax回転による因子分析を行った。その結果、スクリープロットおよび因子の解釈可能性を考慮して、因子負荷量が.40に満たなかった1項目を分析から除外し、残りの5項目を採用した。

(3) 感情体験尺度

感情体験尺度 (FES) (中田 (北出), 2006) の全17項目に対して重み付けのない最小2乗法・Promax回転による因子分析を行った。その結果、スクリープロットおよび因子の解釈可能性を考慮して、因子負荷量が.40に満たなかった3項目を分析から除外し、最終的に3因子全14項目を採用した。項目に多少の変動がみられたが、第一因子、第二因子については先行研究の因子構造とほぼ同じであった。そのため、先行研究と同様に、自分の内面の気持ちを受け止め、大切にしていることを表す項目から成る第一因子を「感情に対する尊重性」因子、感情に巻き込まれることなく、自分の気持ちに近づき理解することができることや、感情を上手く表現できることなどを表す項目から成る第二因子を「感情に対する統制可能」因子とした。第三因子については、感情を十分に感じるできていなかったり、自分の感情への気づきや理解が損なわれていたりすることを表す項目から成るため、本研究では「感情抑制」因子と命名した。

(4) 学校生活不適応尺度

メンタルヘルス尺度 (松原・宮崎・三宅, 2006) の「学業へのつまずき」、「大学生活への充実感の乏しさ」

の2因子（全12項目）に対して、重み付けのない最小2乗法・Promax回転による因子分析を行った。その結果、スクリープロットおよび因子の解釈可能性を考慮して、因子負荷量が.40に満たなかった3項目を分析から除外し、2因子全9項目を採用した。因子構造については、先行研究と同様の結果が得られたため、第一因子を「学業へのつまづき」因子、第二因子を「大学生生活への充実感の乏しさ」因子とした。

(5) 各尺度の信頼性の検討

内的整合性を検討するために、本研究で使用する各尺度の内的整合性を評価するためにCronbachのα係数を算出したところ、ほぼ全ての尺度でα=.70以上の十分な内的整合性が示された。感情体験尺度の第三因子と学校生活不適應尺度の第二因子については、それぞれα=.60, α=.57とやや低い値となったが、いずれも項目数が少ないことが影響したと考えられる。

2. 男女差の検討

男女差の検討を行うために、偽りの自己尺度の下位尺度得点（合計を項目数で除したもの）、同一性拡散尺度の得点、感情体験尺度と学校生活不適應尺度の下位尺度得点（合計を項目数で除したもの）についてt検定を行った。結果については、得点が高いほど各下位尺度の傾向が強いことを示しており、学校生活不適應尺度の下位尺度である学業へのつまづきのみ、男性の方が女性よりも有意に高い得点を示した ($t(269) = 2.07, p < .05$)。その他の下位尺度については、男女の得点差は有意ではなかった。

3. 偽りの自己と同一性拡散が感情体験、学校生活適應に与える影響

まず、全尺度の各項目についての相関係数をTable2に示す。

Table2 全尺度の各下位尺度の相関係数及び内的整合性

	迎合的態度	感情解読	空虚感	他者との感覚のズレ	同一性拡散	感情に対する尊重性	感情に対する統制可能	感情抑制	学業へのつまづき	大学生生活への充実感のなさ
内的整合性	α=.89	α=.82	α=.82	α=.80	α=.79	α=.74	α=.70	α=.60	α=.81	α=.57
迎合的態度	—	-.19 **	.39 **	.55 **	.49 **	-.23 **	-.48 **	.43 **	.15 *	.00
感情解読		—	-.31 **	-.11	-.07	.41 **	.38 **	.16 *	-.18 **	-.09
空虚感			—	.32 **	.36 **	-.53 **	-.51 **	.27 **	.37 **	.31 **
他者との感覚のズレ				—	.55 **	-.04	-.28 **	.60 **	.14 *	-.02
同一性拡散					—	-.20 **	-.26 **	.63 **	.23 **	.07
感情に対する尊重性						—	.43 **	-.12	-.29 **	-.20 **
感情に対する統制可能							—	-.24 **	-.10	-.17 **
感情抑制								—	-.22 **	.02
学業へのつまづき									—	.11
大学生生活への充実感のなさ										—

* $p < .05$, ** $p < .01$

次に、偽りの自己尺度の4つの下位尺度得点と同一性拡散尺度の得点が感情体験及び学校生活適應に与える影響を検討するために、重回帰分析（強制投入法）を行った。感情体験尺度と学校生活不適應尺度については、総得点で分析を行い、感情体験尺度は、下位尺度である「感情抑制」に逆転処理を行い、得点が高いほど感情体験が豊かであることを示している。学校生活不適應尺度については、得点が高いほど学校生活に不適應であることを示している。重回帰式については、感情体験尺度が $R = .75, R^2 = .57$ 、学校生活不適應尺度が $R = .47, R^2 = .22$ であり、モデルは有意であった。偽りの自己の4つの下位尺度と同一性拡散から感情体験及び学校生活不適應適應

Table3 重回帰分析の結果

	感情体験	学校生活不適應
	β	β
迎合的態度	-.20 ***	-.09
感情解読	.26 ***	-.07
空虚感	-.37 ***	.43 ***
他者との感覚のズレ	-.02	-.07
同一性拡散	-.23 ***	.15 *
R^2	.57 ***	.22 ***

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$
β：標準偏回帰係数

に対する標準偏回帰係数を算出した結果をTable3に示す。感情体験に対しては感情解読 ($\beta = .26, p < .001$),

迎合的態度 ($\beta = -.20, p < .001$), 空虚感 ($\beta = -.37, p < .001$), 同一性拡散 ($\beta = -.23, p < .001$) が有意であり, 感情解読が正の影響を, 迎合的態度, 空虚感, 同一性拡散が負の影響を与えていることが示された。また, 学校生活不適応に対しては, 空虚感 ($\beta = .43, p < .001$) と同一性拡散 ($\beta = .15, p < .05$) が有意であり, ともに学校生活不適応に対して正の影響を与えていることが示された。

4. 偽りの自己と同一性拡散による分類

偽りの自己の内的構造をより明らかにするために, 偽りの自己尺度の各下位尺度の因子得点と同一性拡散尺度の因子得点を用いて, Ward法によるクラスター分析を男女別で行ったところ, 男女それぞれが3つのクラスターを得た。男性では, 第1クラスターに38名, 第2クラスターに54名, 第3クラスターに17名, 女性では, 第1クラスターに43名, 第2クラスターに47名, 第3クラスターに72名の調査対象が含まれていた。

次に, 男女別で得られた3つのクラスターを独立変数, 「迎合的態度」, 「感情解読」, 「他者との感覚のズレ」, 「空虚感」, 「同一性拡散」を従属変数とした一要因分散分析を行った。その結果, 男女とも全ての従属変数について有意な主効果がみられた (男性/迎合的態度: $F(2, 106) = 61.58, p < .001$, 感情解読: $F(2, 106) = 28.72, p < .001$, 他者との感覚のズレ: $F(2, 106) = 17.29, p < .001$, 空虚感: $F(2, 106) = 51.83, p < .001$, 同一性拡散: $F(2, 106) = 11.90, p < .001$, 女性/迎合的態度: $F(2, 159) = 70.67, p < .001$, 感情解読: $F(2, 159) = 45.10, p < .001$, 他者との感覚のズレ: $F(2, 159) = 44.70, p < .001$, 空虚感: $F(2, 159) = 33.77, p < .001$, 同一性拡散: $F(2, 159) = 66.22, p < .001$)。Figure1に男性, Figure2に女性の3群の各得点を示す。

また, TukeyのHSD法(5%水準)による多重比較を行った結果, 男性では, 「迎合的態度」が第1クラスター=第2クラスター>第3クラスター, 「感情解読」が第2クラスター=第3クラスター>第1クラスター, 「他者との感覚のズレ」が第1クラスター>第2クラスター>第3クラスター, 「空虚感」が第1クラスター>第2クラスター>第3クラスター, 「同一性拡散」が第1クラスター=第2クラスター>第3クラスターという結果が得られた。第1クラスターは, 「感情解読」のみが低く, 「迎合的態度」などその他の項目が全て高いことから, 個人が相手の気持ちや意図することとは関係なしに, 他者の考えや行動に合わせているという特徴があるため「不適応」群とした。第2クラスターは, 「迎合的態度」, 「感情解読」, 「同一性拡散」が高く, 「他者との感覚のズレ」, 「空虚感」が中程度だったため, 「偽りの自己」群とした。第3クラスターは, 「感情解読」のみ高く, その他の偽りの自己尺度の下位尺度得点や「同一性拡散」は低いことから, 「健康群」とした。

一方, 女性では, 「迎合的態度」が第3クラスター>第1クラスター>第2クラスター, 「感情解読」が第2クラスター=第3クラスター>第1クラスター, 「他者との感覚のズレ」が第3クラスター>第1クラスター>第2クラスター, 「空虚感」が第1クラスター=第3クラスター>第2クラスター, 「同一性拡散」が第3クラスター>第1クラスター>第2クラスターという結果が得られた。第1クラスターでは, 「空虚感」が高く, 「感情解読」が低かったため, 「不適応群」とした。第2クラスターでは, 「感情解読」のみ高く, その他が低かったため, 「健康」群とした。第3クラスターにおいては, 全ての項目が高かったため, 「偽りの自己」群とした。

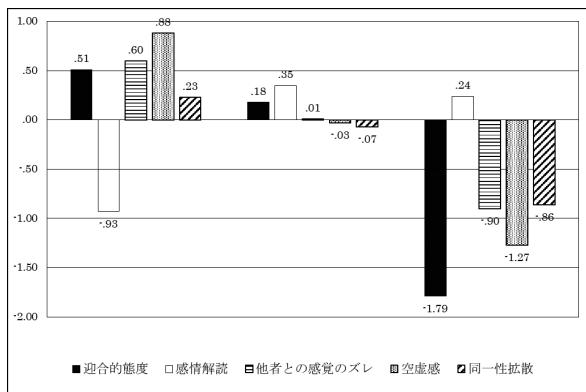


Figure1 クラスター分析の結果 (男性)

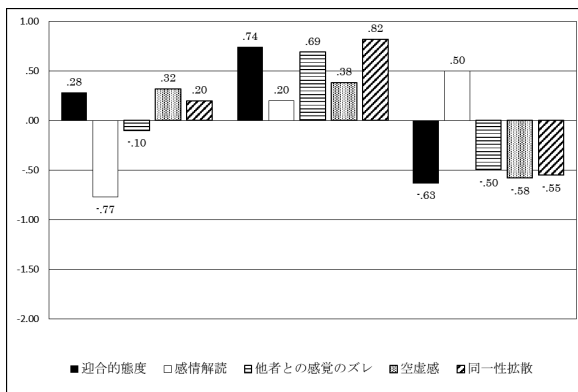


Figure2 クラスター分析の結果 (女性)

5. 各群と感情体験及び学校生活適応との関係

男女のそれぞれの「不適応」群, 「偽りの自己」群, 「健康」群によって, 感情体験尺度の下位尺度得点, 学校生活不適応尺度の下位尺度得点が異なるかどうかを検討するために, 1 要因の分散分析を行った。男女それぞれの 3 群の感情体験尺度の各下位尺度得点, 学校生活不適応尺度の各下位尺度得点の平均値を Figure3 (男性), Figure4(女性)に示す。分散分析の結果, 群間の差は, 男性では「感情に対する尊重性」, 「感情に対する統制可能」, 「感情抑制」が有意であり (感情に対する尊重性: $F(2, 106) = 10.51, p < .001$, 感情に対する統制可能: $F(2, 106) = 31.41, p < .001$, 感情抑制: $F(2, 106) = 10.51, p < .001$), 「学業へのつまずき」, 「大学生活への充実感の乏しさ」については, 有意な差はみられなかった。また, TukeyのHSD法(5%水準)による多重比較を行ったところ, 「感情に対する尊重性」については「不適応」群と「健康」群, 「偽りの自己」群と「健康」群の間に, 「感情に対する統制可能」については各群間に, 「感情抑制」については「不適応」群と「健康」群, 「偽りの自己」群と「健康」群の間に有意な差がみられた。

女性では, 「感情に対する尊重性」, 「感情に対する統制可能」, 「感情抑制」, 「学業へのつまずき」が有意であったが (感情に対する尊重性: $F(2, 159) = 12.56, p < .001$, 感情に対する統制可能: $F(2, 159) = 10.05, p < .001$, 感情抑制: $F(2, 159) = 29.64, p < .001$, 学業へのつまずき: $F(2, 159) = 13.69, p < .001$), 「大学生活への充実感の乏しさ」では有意な差はみられなかった。また, TukeyのHSD法(5%水準)による多重比較を行ったところ, 「感情に対する尊重性」, 「感情に対する統制可能」, 「学業へのつまずき」については, 「健康」群と「不適応」群, 「偽りの自己」群の間に, 「感情抑制」については各群間に有意な差がみられた。

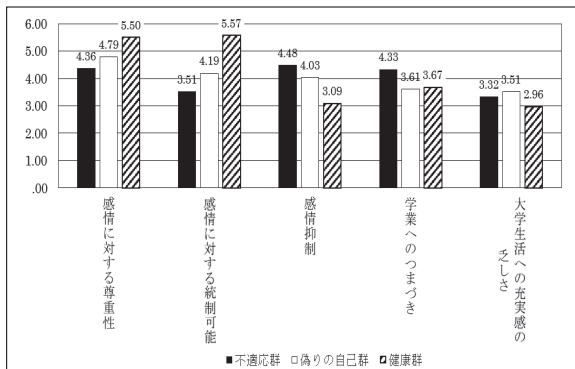


Figure3 3群の感情体験及び学校生活不適応の得点(男性)

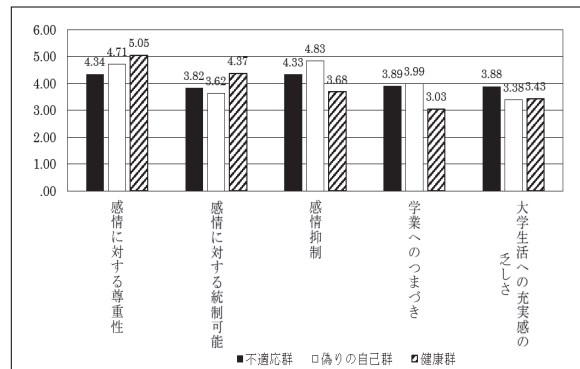


Figure4 3群の感情体験及び学校生活不適応の得点(女性)

IV. 考察

1. 偽りの自己と同一性拡散が感情体験及び学校生活適応に与える影響について

まず, 本研究を進めるにあたって, 既存の偽りの自己を測定する尺度がないため, 新たに偽りの自己尺度を作成した。因子分析を行った結果, 「迎合的態度」, 「感情解読」, 「空虚感」, 「他者との感覚のズレ」の 4 因子構造が確認され, 信頼性についても全下位尺度において十分な内的整合性が確認された。

偽りの自己と同一性拡散が感情体験及び学校生活適応に与える影響を検討するにあたって, 偽りの自己尺度を各下位尺度に分けて重回帰分析を行った。まず, 感情体験に対しては, 「迎合的態度」($\beta = -.20, p < .001$), 「空虚感」($\beta = -.37, p < .001$), 「同一性拡散」($\beta = -.23, p < .001$) が負の影響を与えていること, 「感情解読」($\beta = .26, p < .001$) が正の影響を与えていることが示された。まず, 偽りの自己尺度の下位尺度について考察すると, 他者や環境への「迎合的態度」は, 自己の内的状態とのつながりを欠くものであり, 「空虚な自己」を生む (Fonagy & Target, 2003)。そのため, そのような自己は, リアルな感覚を感じることができず,

豊かな感情体験が困難になるのではないだろうかと考えられる。「空虚感」については、偽りの自己構造をもつ個人の自己経験が、養育者の防衛を内在化し、その偽りの内在化を中心として構築されることが指摘されている (Winnicott, 1965)。そのため、このような偽りの自己構造をもつ者の自己経験様式が、感情体験に大きく影響していると思われる。「感情解読」は、ソーシャルスキルの1つであり、相手の表情や態度などから気持ちを読み取ることを表す項目で構成されている。そのため、「感情解読」が、感情体験に対して正の影響を与えているという結果からは、他者の感情を適切に理解できるほど、自分の感情についても適切にとらえることができ、感情体験が豊かなものになると考えることができるだろう。この結果は、「感情解読」を偽りの自己の適応的側面を測る指標として用いたことから理解できる。しかし、Fonagy (2001) が、偽りの自己構造が極端になると、相手の感情を読み取る能力は非常に高いが、自身の感情への理解は損なわれると述べていることから、感情解読の程度や質によっては、感情体験に対して与える影響が異なることが想定される。今回の研究では、自分ではなく他者の感情への理解のみに焦点を当てたため、「感情解読」が感情体験に対して正の影響を与えているという結果となったが、今後の研究においては、「感情解読」因子を自分の感情への理解の程度や質についても考慮した項目内容にした上で検討する必要があるだろう。「同一性拡散」については、「空虚感」、「感情解読」が感情体験に与えている影響よりは β 値が小さい結果となった。同一性拡散は、自分の将来についての不安や迷い、不安定さといったものが顕在化した状態であり、不安感や抑うつ気分などといった神経症様症状が生じやすい (中谷・友野・佐藤, 2011)。しかし、そのような神経症様症状は感情体験の豊かさとは質的に異なるため、同一性が拡散した状態の者の感情体験については、偽りの自己構造をもつ者ほど損なわれないのではないかと考えられる。

学校生活適応に対しては、「空虚感」($\beta = .43, p < .001$)、「同一性拡散」($\beta = .15, p < .05$)が正の影響を与えているという結果が示された。学校生活不適応尺度については、得点が高いほど学校生活適応が損なわれていると解釈するため、この結果から、「空虚感」や「同一性拡散」が学校生活適応にネガティブな影響を与えていることが分かる。「空虚感」については、仮説では学校生活適応には影響を与えないものと考えていた。しかし、偽りの自己構造をもつ者は、彼らの迎合的側面が学校生活適応をほどよいものにしていただけであって、実際には空虚感を抱きながら生活している。そのため、「空虚感」が学校生活適応に正の影響を与えたという結果は、空虚感を偽りの自己の特徴として捉えれば理解することができる。また、「空虚感」は、青年期の無気力傾向と関連していることが指摘されている (笠原, 1981)。そして、青年期における無気力傾向は、大学の休学や退学にも影響を及ぼすことが明らかになっており (内田, 2008)、こうした視点からも「空虚感」が学校生活適応に対してネガティブな影響を与えていることが理解できるだろう。「同一性拡散」については、同一性拡散が、将来への方向性だけでなく、自分という存在への確信や自信についても獲得できていない状態であるため、「学業が自分に向いていない」、「卒業について不安がある」(質問項目より抜粋)などといった思いを抱きやすく、学校生活適応に影響を与えていると考えられる。

これらのことを踏まえて仮説について検証すると、仮説1は一部支持されたといえるだろう。仮説2については、「同一性拡散」だけでなく、「空虚感」についても学校生活適応に影響を与えていることが示されたため、仮説は支持されなかった。この結果については、偽りの自己尺度の「空虚感」因子が、同一性拡散に近いものを抽出していたり、偽りの自己と同一性拡散の空虚感の質の違いを弁別できていなかったりした可能性があると考えられる。そのため、今後は「空虚感」の質の違いをどのように弁別するかが課題として挙げられる。

2. クラスタ分析による偽りの自己の内的構造の検討

(1) 各クラスタの解釈

偽りの自己の内的構造について、より詳しく探索的に検討するために、偽りの自己尺度の各下位尺度の因子得点と同一性拡散尺度の因子得点を用いて、男女別でクラスタ分析を行った。その結果、男女それぞれが3つのクラスタを得た。同一性拡散については、偽りの自己尺度の「迎合的態度」、「感情解読」、「空虚感」が偽りの自己構造をもつ者よりも低い得点を示すと想定していたが、合致する群が得られなかったため、今回は「不

適応」群と「偽りの自己」群との比較を行った。

男性では、各クラスターの特徴から、第1クラスターを「不適応」群（38名）、第2クラスターを「偽りの自己」群（54名）、第3クラスターを「健康」群（17名）と命名した。各群の特徴について他の群と比較しながら詳細に検討していくと、「健康」群については、「感情解読」のみが非常に高く、その他の偽りの自己の特徴や「同一性拡散」が極端に低いことから、本研究の被検者の中でも比較的健康的な状態の者の集まりであるといえるだろう。一方で、「不適応」群と「偽りの自己」群については、両者が非常に類似した構造を示し、両者とも「迎合的態度」、「他者との感覚のズレ」、「空虚感」、「同一性拡散」が「健康」群よりも有意に高かった。しかし、「感情解読」については、「不適応」群が低く、「偽りの自己」群が高いという顕著な違いがみられた。この結果は、たとえ同じ迎合的態度をとっていたとしても、その性質に違いがあることを示していると考えられる。「偽りの自己」群のように、「迎合的態度」と「感情解読」がともに高い場合は、個人が相手の気持ちや意図することを適切に理解した上で、それに合わせて行動していると思われるが、「不適応」群のように、「迎合的態度」が高く「感情解読」が低い場合には、個人が相手の気持ちや意図することとは関係なしに、ただそれとなく他者の考えや行動に合わせているといえるだろう。また、「他者との感覚のズレ」と「空虚感」については、「不適応」群の方が「偽りの自己」群よりも有意に高かった。この結果については、偽りの自己構造をもつ者が、その構造がより健康的なものに近いのか、あるいはその構造が極端であるが故に問題なく日常生活を送っており、「空虚感」や「他者との感覚のズレ」があまり意識されていない可能性があると考えられる。

女性については、各クラスターの特徴から第1クラスターを「不適応」群（43名）、第2クラスターを「偽りの自己」群（47名）、第3クラスターを「健康」群（72名）と命名した。「健康」群については、男性の「健康」群と同様の構造を示したが、「偽りの自己」群においては、「不適応」群よりも「迎合的態度」、「他者との感覚のズレ」といった項目が有意に高く、男性よりも女性の「偽りの自己」群の方がより偽りの自己の特徴を示す結果となった。

以上のことから、「健康」群との比較では、偽りの自己構造をもつ者の特徴として「迎合的態度」、「空虚感」、「他者との感覚のズレ」が挙げられ、「不適応」群との比較からは、「感情解読」が偽りの自己構造をもつ者の特徴を弁別する上で非常に重要であることが示されたといえるだろう。

(2) 男女の各群における感情体験と学校生活適応

男女それぞれの「偽りの自己」群、「不適応」群、「健康」群によって、感情体験尺度の下位尺度得点、学校生活不適応尺度の下位尺度得点にどのような違いがみられるかを検討するために、1要因の分散分析を行った。その結果、男性では、感情体験尺度の各下位尺度でのみ有意な結果が得られた。「感情に対する尊重性」と「感情に対する統制可能」においては、「不適応」群と「偽りの自己」群が低く、「健康」群が高かった。中でも、「感情に対する統制可能」については、「不適応」群の方が「偽りの自己」群よりも有意に低いという結果が示された。「偽りの自己」群の「感情に対する尊重性」と「感情に対する統制可能」が低いことは、重回帰分析の結果からみても納得のいく結果であるが、「不適応」群においても「感情に対する尊重性」と「感情に対する統制可能」が低いことには、「不適応」群の「空虚感」が高いことが影響しているように思われる。空虚感と感情体験の乏しさは、両者とも生き生きとした感情を感じる事が出来ずに虚しさを感じていたり、自分がどのような感情を抱いているのかが分からなかったりする状態を表す類似した概念であるため、「空虚感」が高い群においては「感情に対する尊重性」や「感情に対する統制可能」が低くなることが予想される。そのため、「空虚感」の得点が最も高かった「不適応」群は、「偽りの自己」群や「健康」群よりも「感情に対する統制可能」が有意に低くなったのではないかと考えられる。一方、「感情抑制」については、「不適応」群と「偽りの自己」群が高く、「健康」群が低い結果となった。「感情抑制」の項目は、「自分の感じていることがよく分からないことが多い」や「喜んだり悲しんだりしていてもそれが本心からのものではないように感じる」などといった、自分が抱く感情について理解できなかつたり、自身の感情を自分のものではないように感じてしまうことを表している項目が多い。よって、「不適応」群については、「空虚感」が高いことが影響して、自分がどういった感情を抱いてい

るかを把握できずにいると考えることができる。また、「偽りの自己」群は、他者や環境に迎合することが彼らの防衛的機能であるため、自分の感情に焦点が当たらず、感情が抑制されているのではないかと考えられる。

女性では、感情体験尺度の各下位尺度および学校生活不適応尺度の「学業へのつまずき」でのみ有意な結果が得られた。感情体験の各下位尺度については、男性の場合と同様に、「感情に対する尊重性」と「感情に対する統制可能」が、「不適応」群と「偽りの自己」群で「健康」群よりも低く、「感情抑制」については、「不適応」群と「偽りの自己」群が「健康」群よりも高かった。しかし、「感情抑制」のみ、男性の場合とは異なり、「偽りの自己」群と「不適応」群の間で有意差が認められ、「偽りの自己」群の方が「不適応」群よりも「感情抑制」が高いことが示された。この結果は、偽りの自己構造に近い特徴をもつ方が、感情を抑制する傾向が強い可能性があることを示唆している。Fonagy (2001) が、偽りの自己構造をもつ者のメンタライゼーション機能は、相手を理解することに関しては過活性化しているが、それゆえ自己理解を犠牲にしてしまうと指摘していたように、偽りの自己構造に近い者ほど、自己理解が損なわれ、自分の本当の気持ちに近づくことができなくなるのではないだろうか。学校生活不適応尺度の「学業へのつまずき」については、女性のみ有意な結果が得られ、「不適応」群と「偽りの自己」群が高く、「健康」群が低かった。「学業へのつまずき」は、「単位について不安がある」、「自分の成績はよくないと思う」など、学業に対する不安を表す項目で構成されている。「不適応」群については、「偽りの自己」群と同程度に高い「空虚感」が、青年期の無気力傾向やそれに伴う休学や退学との関連が示されていることから(内田, 2008)、学業の成績についての不安も高くなるのではないかと考えられる。一方、「偽りの自己」群については、その適応的側面から、本来であれば「学業へのつまずき」に関しては低くなるはずである。しかし、先述した通り、今回用いた学校生活不適応尺度の「学業へのつまずき」因子は、学業の成績に対する不安を表す項目で構成されていることから、「偽りの自己」群の者が、学校生活に適応するために、学業の成績に対して不安を抱いているのではないかと推測される。

3. 本研究のまとめと今後の課題

本研究では、青年期に焦点を当て、偽りの自己の内的構造を明らかにし、感情体験と学校生活適応に対する影響について検討した。また、同一性拡散を対照として、偽りの自己の内的構造と感情体験及び学校生活適応に与える影響について比較することで、偽りの自己の特徴の明確化を試みた。

まず、重回帰分析の結果からは、偽りの自己(特に、「感情解読」、「空虚感」)が同一性拡散よりも感情体験に影響を与え、学校生活適応については同一性拡散と偽りの自己尺度の「空虚感」因子が影響を与えていることが示された。

クラスター分析では、当初想定していた同一性拡散の構造を示す群は得られなかったが、「偽りの自己」群と「不適応」群及び「健康」群を比較し、偽りの自己の内的構造について探索的に検討を行った。その結果、「偽りの自己」群が、「健康」群と比べて「迎合的態度」、「他者との感覚のズレ」、「空虚感」において高い得点を示すことが明らかとなった。特に、女性の「偽りの自己」群においては、「迎合的態度」や「他者との感覚のズレ」、「感情解読」が「不適応」群と比べても有意に高く、本研究で抽出された群の中で最も偽りの自己に近い群となった。そして、「偽りの自己」群と「不適応」群との比較では、男女共に偽りの自己尺度の下位尺度である「感情解読」に大きな差がみられた。この結果からは、「感情解読」が偽りの自己の特徴を弁別する上で非常に重要であることが示されたといえるだろう。考察でも述べたように、「不適応」群の「感情解読」が低く、「偽りの自己」群の「感情解読」が高かったことは、両者の「迎合的態度」の性質の違いを示しているといえる。「偽りの自己」群の「感情解読」の高さは、相手の気持ちや意図することを適切に理解した上で、それに合わせて行動していることを示しているが、「偽りの自己」群のこのような特徴は、過剰適応(Over-Adaptation)の特徴と非常に類似している。過剰適応とは、「環境からの要求や期待に完全に近い形で従おうとすることであり、内的な欲求を無理に抑圧してでも、外的な期待や要求に応える努力を行うこと」である(新井田, 2014)。過剰適応は、非常に適応的であることから、世間的に「よい子」とみなされることが多く(桑山, 2003)、過剰適応の事例によっては、偽りの自己の概念を用いて理解されることもある(堀, 2006)。それゆえ、本研究における調査で抽出された「偽

りの自己」群は、過剰適応とも関連づけて理解することができるだろう。

以上の結果から、本研究において、偽りの自己の内的構造の特徴として、「迎合的態度」や「感情解説」、「他者との感覚のズレ」、「空虚感」が挙げられ、特に「感情解説」が偽りの自己の特徴を弁別する上で重要となること、また、このような偽りの自己構造の特徴が感情体験や学校生活適応に影響を与えることが示された。

今後の課題としては、まず、今回使用した偽りの自己尺度の「空虚感」因子や「感情解説」因子について、それらの項目内容を再検討する必要があるだろう。先述したように、「空虚感」因子については、その質を再検討する必要があり、「感情解説」因子については、相手の感情を理解している程度や、相手だけでなく自分自身の感情についてもどの程度理解できているかをより詳しく測る必要がある。これらを見直して改善することによって、より偽りの自己の特徴を捉え、同一性拡散との弁別を図ることが可能になるとと思われる。その上で、偽りの自己尺度の妥当性についても検討する必要があるだろう。本研究では、信頼性の検討のみを行っているため、今後は妥当性についても十分に検討した上で、偽りの自己尺度の適用可能性について考えていく必要がある。また、本研究は、質問紙調査のみを用いたため、「無自覚に他者や環境に迎合する」という偽りの自己構造の無意識的側面が考慮されず、偽りの自己構造をもつ者の抽出や同一性拡散との弁別が困難になったとも考えられる。そのため、今後は質問紙法だけでなく、個人の無意識的側面についても扱うことのできる投映法やより多面的に情報を得ることができると面接法なども取り入れることで、一般青年の中に含まれる偽りの自己構造をもつ者について、検討することができるだろう。

付記

本論文は、平成 27 年度に京都教育大学大学院教育学研究科へ提出した修士論文の一部を加筆・修正したものである。

引用文献

- 相川 充・藤田正美 (2005). 成人用ソーシャルスキル自己評定尺度の構成 東京学芸大学紀要 1 部門, 56, 87-93.
- 新井田はつよ (2014). 過剰適応に関する尺度の検討—2つの尺度を用いて—北星大学大学院論集, 5, 103-114.
- 江上奈美子 (2011). 大学生における境界例心性がライフイベントおよび快・不快感情に及ぼす影響 パーソナリティ研究, 20 (1), 21-31.
- 榎木宏之 (2003). 偽りの自己の問題を抱えた女性との心理療法過程 精神分析研究, 47 (2), 199-205.
- Fairbairn, W. R. D. (1952). *Psychoanalytic studies of the personality*. Tavistock Publications.
- (山口泰司 (訳) (1995). 人格の精神分析学 講談社)
- Fischer, K. W. (1980). A theory of cognitive development: The control and construction of hierarchies of skills. *Psychological Review*, 87, 477-531.
- Fonagy, P. (2001). *Attachment Theory and Psychoanalysis*. New York: Other Press.
- (遠藤利彦・北山 修 (監訳) (2008). 愛着理論と精神分析 誠信書房)
- Fonagy, P. & Target, M. (2003). *Psychoanalytic Theories: Perspectives from Developmental Psychopathology*. Whurr Publishers Ltd.
- (馬場禮子・青木紀久 (監訳) (2013). 発達精神病理学からみた精神分析理論 岩崎学術出版社)
- Guntrip, H. J. S. (1971). *Psychoanalytic theory, therapy, and the self*. Basic Books, Inc.
- (小此木啓吾・柏瀬宏隆 (訳) (1981). 対象関係論の展開 誠信書房)
- 堀 恵子 (2006). 過剰適応の背景にある対象関係 精神分析研究, 50 (2), 135-142.
- 飯島みどり (2002). 3つの事例に見る適応の在り方—「偽りの自己」としての見方から— 学生相談研究, 23, 21-32.
- 笠原 嘉 (1981). スチューデント・アパシー第三報 現代のエスプリ, 167, 24-28.

- 北山 修 (1999). 自らをヌイグルミにして生きる患者—言葉と意味の上滑りの取り扱い—精神分析研究, *43* (1), 39-46.
- 桑山久仁子 (2003). 外界への過剰適応に関する一考察—欲求不満場面における感情表現の仕方を手がかりにして—京都大学大学院教育学研究科紀要, *49*, 481-493.
- 松原達哉・宮崎圭子・三宅拓郎 (2006). 大学生のメンタルヘルス尺度の作成と不登校傾向を規定する要因—立正大学心理学研究所紀要, *4*, 1-12.
- 長尾 博 (1989). 青年期の自我発達上の危機状態尺度の作成の試み—教育心理学研究, *37*, 71-77.
- 中田 (北出) 薫 (2006). イラショナル・ビリーフと感情の体験様式との関連—感情体験尺度作成の試みを通して—パーソナリティ研究, *14* (3), 241-253.
- 中谷陽輔・友野隆成・佐藤 愛 (2011). 現代青年においてアイデンティティ (自我同一性) の危機は顕在化するのか—パーソナリティ研究, *20* (2), 63-72.
- 舘 直彦 (2012). 現代対象関係論の展開—ウィニコットからボラスへ—岩崎学術出版社
- 内田千代子 (2008). 大学における休・退学, 留年学生に関する調査—茨城大学保険管理センター内「休・退学, 留年学生調査」事務局, *28*.
- 内田利広 (1997). 「自分」と家族—親の期待に沿おうとする「迎合的自己」—北山 修 (編) 日本語臨床 (2) 「自分」と「自分がない」 (pp. 91-105) 星和書房
- Winnicott, D. W. (1965). *The Maturation Processes and the Facilitating Environment*. London: The Hogarth Press Ltd.
- (牛島定信 (訳) (1977). 情緒発達の精神分析理論—岩崎学術出版社)
- 山川裕樹 (2002). Schizoid心性について—質問紙作成の試み—京都大学大学院教育学研究科紀要, *48*, 211-222.